
ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

ムウマージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 理想の捜索隊

【Nコード】

N7159X

【作者名】

ムウマージ

【あらすじ】

星の衝突をまのがれて、さらに時の停止騒動も収まり、世界は真の平和が訪れたと思われていた
だが・・・そんな中、この世界に更なる危機に直面する・・・
それは、ほんの一つの出会いから・・・

もうさ、このストーリー次回作みたいのでok？

とかいう流れでオリジナルストーリー！

なんて思ったポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊の続編！

プロローグ（前書き）

はあ〜い！ムウマージです！

勢いで新小説投稿！

今回はDPシリーズ？違うな、BWシリーズだ！
という話

それではどうぞ！

プロローグ

ポケモン不思議のダンジョン 理想の捜索隊 プロローグ

雷が鳴り響く嵐の空

「はぁ・・・はぁ・・・」

「もっと・・・もっと早く!」

嵐の中を飛ぶ一匹き、その背中に乗っている一人

『わかってる・・・わかってるよ!』

カツ

雷が落ちる

『あぁっ!』

雷が一匹の翼をかする

「わっ!」

雷が翼にあたり、バランスを崩したせいで。背中に乗っている一人が落ちかける

ガシッ

落ちかけた所を一匹がギリギリ、手を掴む

『ぐっ……』

「……！離して！このままじゃあなたも落ちちゃう！」

『だめだよ！そんな……！』

「あなただったらきつとあれを見つけられるはず……！私は大丈夫だから！離して！」

カツ！

大きな雷が落ちる

『うわあああああ！！』

「きゃあああああ！！」

一匹と一人が離ればなれに墜ちて行く……

山の草原

嵐は過ぎ去り、雲一つない真っさらな空

そんな中、山にある草原に一匹のポケモンが倒れていた

『う……こっちは……？』

『私……生きてるの？』

『うつ・・・駄目だ・・・意識が薄れて・・・』

『フライゴン・・・後はたのんだ・・・よ・・・』

『・・・』

そう言つと一匹のポケモンは気を失つた

プロローグ（後書き）

シェーイ！プロローグ 完！
次回ゆっくりしていつてね！

第1話 山の草原で(前書き)

い、い。(。)(ノデキマシタ
ソレデハドウゾ

第1話 山の草原で

第1話 山の草原で

山の中腹 居住区

ここはポケモン達が住む山の中腹にあるポケモン居住区

そこにいる一匹のミジユマル

「うわぁー！綺麗な虹ー！」

空を見上げながら言う

「・・・あれ？なんだろう・・・？」

首を休めようと下を向いた時、ふと、崖下の草原に草と別な物があるのが見えた

それを凝視する

「あつ！？ポケモンが倒れてる！？」

それがポケモンだとわかり、すぐさま、そのポケモンの元へと走っていった

山の中腹 山の草原

タッタッタツ・・・

倒れていたポケモンの近くに駆け寄る

「ねえ！大丈夫！？ねえ！ねえってば！」

倒れているポケモンを揺らす

「う……う……ん？」

倒れていたポケモンが目を覚ました

「よかつたあ……ねえ、大丈夫？」

ツタージャに呼びかける

「え……うん……ん！？」

それを聞いて、返したあと、驚きの声を漏らした

「？どうかしたの？」

「あ……あれ？おかしいな……？」

「なんで……なんでミジュマルが喋ってるの……！？」

……

「え？なんでって……あなたでしょ？ツタージャ」

「え……？わ、私はツタージャなんかじゃないわよ！私は人よ！」

目の前にいるツター ज्याの言葉に困惑する

「ええ！？で、でも、どこからどう見たって、ツター ज्याだよ！」

「そんな訳……」

ツター ज्याが自分の手を見て、硬直した

「え……？」

ツター ज्याが手から滑るように体に目をやった

「な、な、な、なにこれえ！？」

「嘘でしょ！？なんで私ツター ज्याになったになってるの！？」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫な訳ないわよ！！」

「と、とにかく落ち着いて！冷静に考えよ！」

ツター ज्याを落ち着かせようとする

「う……うん……」

ツター ज्याが落ち着いてくれた

「それで……あなたはどうしてツター ज्याになったか分かる？」

「わかってたら、こんなに騒がないよ・・・」

「そうだよね・・・」

正論である

「それに・・・」

「それに？」

「なんでかわかんないけど、人間だった時の記憶とかほぼ覚えてないの・・・」

「覚えてない・・・？」

「うん・・・あ、でも、一つだけ覚えてる事があるの・・・」

「一つだけ・・・？それって・・・何？」

「名前・・・私の名前・・・」

「どんな名前なの？」

「えっと・・・リン・・・」

「リン・・・ていうんだ・・・」

リン・・・それが目の前にいるシタージャの名前なのだろう

「うん・・・」

「けど・・・人間がポケモンになるなんて・・・ありえるのかな・・・」

「それって、私の話、信じてないって事!？」

「ち、違うよ!リンの話は信じてるよ?」

「でも、何が起きたら、人間がポケモンになるんだろって・・・」

「・・・」

ツタージャが首を下ろす

「ご、ごめん、なんかひどい事言ったかな・・・?」

さっきの自分の言葉がいけなかったのだろっと思ひ、謝る

「ち、違うよ・・・ただ、これからどうしようって思ってたね・・・」

「・・・」

ポトツ

ミジュマルが持っている貝から何かが落ちて、転がる

「あ、待って!」

ミジュマルはそれを追っていった

ミジュマルが落とした物は地面に空いていた穴に落ちていった

「あゝ!?!」

「ど、どうかしたの?」

「わ、私の宝物が・・・落ちちゃったの・・・」

「穴・・・?」

リンがミジュマルの近くに寄る

「・・・この穴に?」

「・・・うん」

「・・・」

リンがその穴を覗き込む

「・・・大分深そうね・・・」

「一緒に取りに行ってあげようか?」

「え!?!ほ、ほんと!?!?」

「うん、一応助けてもらったし・・・」

「あ、ありがとう・・・!」

「別に良いって、あのさ、なんかロープみたいなない？」

「ロープ？わかった、取ってくる」

そう言うとミジュマルは自分の家へと走っていった

タッタッタツ・・・

「おーい！取ってきたよ！」

ロープを持って、ミジュマルがツタージャと合流した

「はい！」

「ありがとう」

ミジュマルからロープを受け取ったツタージャが礼を言う

受け取ったロープを近くにあった木に縛りつけ、もう一方の方の穴へと降ろした

「ところでさ、落とした物って何？」

「えっとね、丸くて、小さいんだけど、赤い色してるの」

「赤い色ね・・・」

「わかった、降りましょ！」

「うん」

二匹がロープをつたって、穴に降りていく事にした

第1話 山の草原で（後書き）

、イ（。。）ノカン デス
ジカイモユツクリマツテテネ！

第2話 ダンジョンへ(前書き)

大変お待たせしました

理想の搜索隊、第2話完成しました

それではどうぞ！

第2話 ダンジョンへ

第2話 ダンジョンへ

崖の洞窟

リン達は、ミジュマルの宝物を探すために、洞穴の一番下まで降りてきた

そして、リン達が、洞穴の探索を初めてからしばらくして・・・

「なんなの・・・このありえないくらい複雑な道は・・・」

リンが呆れながら言う

「はあ・・・何よここ・・・まるでダンジョンじゃない・・・」

「ダンジョン・・・？あ！」

ミジュマルが何かを思い出したようだ

「どうしたの？ミジュマル・・・」

「ダンジョンって聞いて思い出したんだけどさ、こんな風に道が複雑な所を不思議のダンジョンって言うらしいの」

「不思議の・・・ダンジョン・・・？」

リンが不思議そうに聞き返す

「うん、本とかに書いてあったんだけど、不思議のダンジョンは、入るたびに地形が変わっちゃう所らしいの・・・」

「地形が変わる・・・？」

（地形が変わるなんて・・・そんな事ありえるの・・・？）

「でも、なんでこんな所が・・・？」

「原因は星の温暖化、詳しい理由は分かってないけど、そのせいでこのダンジョンが増えてるんじゃないかって言われてるの・・・」

「星の温暖化って・・・どついう事？」

「最近、この星の全土で気温が上がってきてるの」

「でも、こつちの原因はまだ不明みたいで、色々と調査してるんだって・・・」

「ふん・・・」

（ダンジョンが増えてる事と星の温暖化・・・か・・・）

「取りあえず・・・早く探し出して、外に出ましょ」

「うん」

サツサツサツ・・・

しばらくして・・・

「さっき、階段みたいなのを見つけたから、降りてみたけど・・・」

「まだ続いてるんだね・・・」

「はぁ・・・何処に転がっていったのやら・・・」

ため息混じりに言う

ザッ・・・

「え？」

ザッザッザッ・・・

足音が聞こえてくる

「足音・・・？」

「私たち以外に誰かここにいるの・・・？」

「もしかしたらね・・・」

ザッザッザッ・・・

足音が段々近づいてきている事に気づく

「近づいてきてない・・・？」

「え……?」

ミジユマルが耳を立てる

「ほ、本当だ……!」

「ど、どつするの?」

「どつするって言われても……」

ザッザッザッ……

その間にもどんどん足音は大きくなっていく

「か、隠れる場所は!?!」

辺りを見回す

身を隠せるほどの草もなく、逃げ込めるような道も足音が聞こえてくる方向にある道しかない

「に、逃げ道なし……?」

「ど、どつじよう……」

「……」

リンが身構える

それにつられ、ミジユマルも身構える

ザッザッザッ……

足音の主が通路から出てくる

ヨーテリーだ

「な、なんだ……普通のポケモンじゃない……」

ミジュマルが身構えるのをやめる

だが、リンは身構えるのを止めなかった

「リン……？どうかしたの？」

「なんか……あいつ、変な感じが……」

「変な感じ……？」

ヨーテリーがリン達の方を向く

「ミジュマル！気を付けた方がいいかも……！」

「え？気をつけた方がいいって……」

「……！、ミジュマル！前！」

「へ？」

ミジュマルが前に振り返る

ヨーテリーが走ってきている！

「え!?!」

「まずい……!」

タッタッ!

リンがミジュマルに走り寄る

「うわっ!?!」

ミジュマルをヨーテリーの直線上から離れさせる

リンはすぐにヨーテリーの方へと目を向けた

ヨーテリーはズザザザと地面を擦りながら、止まろうとしていた

「ミジュマル、大丈夫?」

「うん……ありがとう……」

「いいのよ、それよりあいつ、攻撃しようとしてきたよね……」

「うん……」

「なら、攻撃しても大丈夫よね……!」

「え!?!まさか倒すつもり!?!」

「だって、そうしなきゃ、落ちていてミジュマルの宝物を探せない

しね

「でもさ、リンってちゃんと戦えるの……?」

「……」

リンがリリースする

「あ、リン!? おーい!」

「だ、大丈夫よ! きつと! うん!」

明らかに大丈夫のようには見えない

「無茶しないほうがいいよ……私に任せて……!」

「ミジュマルが……?」

「うん! 任せてよ!」

ヨーテリーがようやく止まり、こちらを向く

ミジュマルに向かって走っていく!

「よっ、と!」

ヨーテリーの攻撃を横に避ける

「体当たり!」

攻撃で隙だらけのヨーテリーにミジュマルは体当たりをする！

ドンー

ヨーテリーは前のめりに倒れる

「よっしー！」

「・・・」

(暇だなあ・・・)

ザッザッ・・・

リンの後ろから足音が聞こえてくる

「！？」

すぐさま、後ろを振り向く

後ろには、チヨロネコがいた

「わっ！」

反射的に後ろに下がる

「リン！どうかしたの！？」

ミジュマルがリンに声を掛ける

「他の奴が来ちゃったの・・・」

「待ってて！こいつを倒して・・・」

「大丈夫！私が倒すから！」

「でも、リンは技の出し方分らないんじゃないでしょ！？」

「体当たりぐらいだったら、出来るはずよ！」

「・・・わかった、気をつけてね・・・！」

「わかってる！」

ザッ・・・

リンが戦闘態勢に入る

「さてと・・・さあ、どっからでも掛かってきなさい！」

タッタッタッ・・・

チヨロネコはリンに向かって走り出す！

「来たわね・・・！」

タッタッタッ・・・

チヨロネコは、リンとの間合いを詰めていく！

「・・・」

タン！

チヨロネコが地面を蹴り、空中に浮く！

「上!?!」

チヨロネコがリンに向かって飛び降りていく！

「やばっ・・・!」

チヨロネコの攻撃を横に避ける

(だめ・・・間に合わない!)

ザシユ!

チヨロネコの爪がリンの手をひっかく!

「うぐっ・・・!」

すぐにその場から離れる

チヨロネコもリンから距離を取る

「いてて・・・」

「やったわね・・・!」

タッタッタッ・・・

リンがチヨロネコに向かって走る！

タツタツタツ・・・

チヨロネコの目の前まで接近する！

「こん・・・」

ザッ！

リンがチヨロネコの直線上から横にずれる！

チヨロネコがリンの方を向く

「にゃろっ！」

ドン！

チヨロネコに全身でたいあたりする！

チヨロネコが少しだけ吹っ飛ばされるが、すぐさま体制を立て直した

「よっしー！」

うまく攻撃が入った事に喜ぶ

タツ！

チヨロネコがリンに向かって走る！

ザツ・・・

リンが構える

タツタツタツ・・・

ザツ！

チヨロネコがリンの横に素早く移動する！

「横・・・！？」

ザシユ！

「きゃあっ！」

リンの顔をチヨロネコの爪がひっかく！

「ぐっ・・・」

「リン！」

ミジユマルの声が聞こえてくる

ドン！

チヨロネコが何かに吹っ飛ばされる

「え．．．？」

チヨロネコはそのまま床に倒れる

「大丈夫？リン」

ミジユマルに声を掛けられる

「へ？う、うん、大丈夫．．．」

「よかった．．．リン。早く見つけて、帰りましょ」

「そ、そうね、また襲われたらやばいし．．．」

タッタッタツ．．．

「階段つばい所を降りてきたけど．．．」

「なんか、ひらけた場所に出たね．．．」

先程までの複雑な通路とは違い、何も無い所に出たようだ

「ここが一番下．．．って事かな？」

「多分ね．．．」

「あ！」

「どうしたの？」

「リン！見つけたよ！ほら、これ！」

ミジュマルが赤い宝石をリンに見せる

「わぁ……綺麗ね……」

「これ、この前、草原で拾った物なの！」

（草原で見つけたって……大丈夫なの……？）

ザア……

（……え？）

ザアア……

（な、なにこれ……）

（め、めまい……？にしては、なんか変な感じが……）

汝……草蛇の皮を被る者なり……

汝……人の心持ちし者なり……

（な、なんなの……この声……幻聴……？）

「リン……？おい！」

「へ？あ、何！？」

「いや……なんかぼーっとしてたけど……どうかしたの?」

「い、いや、なんでもないよ……ちょっと考えごととしてただけ……」

「ふうん……」

「それより、戻りましょ」

「そっね……」

ザッザッザッ……

第2話 ダンジョンへ(後書き)

はい、第2話 完 です

次回もゆっくり急いで行ってね！

第3話 ギルドに入門！（前書き）

はい、ゆっくりとしすぎたムウマーシです

さうで、次は星だな・・・

それではどしどし！

第3話 ギルドに入門！

第3話 ギルドに入門！

山の草原

「ふう〜・・・なんとか出てこれたね・・・」

「うん・・・」

「さてと・・・それでリンはこれからどうするの？」

「どっしりぶっぶっ・・・」

腕を組んで考える

「・・・リン、ちょっと提案があるんだけど・・・」

「提案？」

「着いてきて」

そう言うと、ミジュマルは歩きだした

リンはミジュマルの後を追った

山の頂上付近

山を登っていき、頂上に近い一つの建物の前にたどり着いた

「ここは……?」

「ここは、ギルドなの」

「へ?ギルド!？」

あまり聞かない言葉に驚く

「うん、このギルドは、搜索隊のギルドなんだ」

「搜索隊の……ギルド?」

「搜索隊というのは、困ってるポケモンを助けたりとか、お尋ね者を捕まえたりとかそういう系の仕事をする職業なの」

いわば、警察に近い仕事……?

「それで、ここはその搜索隊の拠点みたいな所で、ポケモン達からの依頼とかがあるんだって」

「へえ……」

「……そういえば、ミジュマルはなんでそんなに詳しいの?」

「実は、うちのお姉ちゃんが搜索隊なんだ」

「へ、へえ……」

姉が捜索隊・・・凄いわね・・・

「それでさー！」

「へ？」

「私ね、リンとならいいチームになれそうな気がするの！」

「え？ちよ、ちよっと待って、それって・・・」

「お願い！一緒に捜索隊になって！」

「ええええ！？」

私に捜索隊になれと！？

「で、でも私、捜索隊とかそういう事、やれるような自信も実力もないし・・・」

「第一、私達、まだ会ったばかりだよ！？」

「うん、たしかにそう・・・だけどね、私、リンとなら立派な捜索隊になれると思うの！」

「それに・・・リンがポケモンになっちゃった理由もわかるかもしれないよ？」

「・・・」

ポケモンになっちゃった理由・・・

「・・・わかったわ、一緒に・・・捜索隊になりましょ」

まあ、こうでもしないと真実なんて見つけれないだろうし、なに
より面白そうだしね

「え？ほ、ほんと！？やったあ！」

ミジユマルが大はしゃぎで喜ぶ

「それじゃあ、私達一緒に捜索隊になるんだし、私の本名、教えて
あげるね」

あっちは本名じゃなかったのね・・・まあ、よく考えてみればそう
よね・・・

「私の名前、本当はミルって言うの」

「改めて、よろしくね！リン！」

「ミル、これからもよろしく！」

「さあて、それじゃあ、ギルドに入りましょ！」

「うん！」

サッサッサッサ...

ギルド 内部1F

中に入ってみると、そこには、梯子が一つ下へと続いていた

「え〜と・・・とりあえず、この梯子を降りていきましょう」

ギルド 内部2F

はしごを降りてくると窓が左右に取り付けられていて、外からの光で部屋全体が明るくなっている
そして、至る所にポケモン達が居る
よく見れば、大体2、3匹集まっている

「思ったたより、搜索隊って多いわね・・・」

なんか選ばれた精鋭みたいなものかと・・・

「まあ、搜索隊になる事自体は難しい事じゃないらしいからね」

「そうなんだ・・・」

「あれ〜？ミルなにやってんの？」

私たちの後ろから声がする

しかも、ミルって言ってたし・・・

振り向くと、水色の体と青色の腹巻きみたいな物を付けていて、その左右にホタテがくっついてる・・・あと、尖った白い髭が横二本生えてる・・・

「あ、お姉ちゃん」

やっぱりか……

「あのね、私達これから捜索隊になろうと思ってるんだ！」

「ふうん……」

「で、横にいる子は？」

なる事には無関心!？

「私と捜索隊やってくる、リン」

「あ、こんにちわ……」

「……まあ、とりあえず、こここのギルドに入るんでしょ？」

「うん、そのつもり」

「だったら着いてきなさい、親方様のところまで案内してあげるから」

そう言うと、下に下る梯子へ歩いて行き、梯子を伝って降りていった私たちも一緒に下に降りていった

ギルド 内部3F

3階も部屋の作りは2階とほぼ同じで、違う所とすれば、通路が左

右に続いてるって言う所だろうか・・・

「さ、こっちこっち」

梯子を降りて、すぐ横にある扉の前にミルの姉が立っていた

コンコン

「親方様へ志願者来ました」

ミルの姉は不思議なマークの付いてるドアをノックして、中に居る親方様？に声を掛ける

「入ってきていよ」

部屋の中から女っぽい声が聞こえてくる多分、この声の主が親方様なんだと思う

「それじゃあ、お邪魔します」

キィィ・・・

ミナの姉は、ドアに手を掛けて、ゆっくりと開けていった

「さ、入った、入った！」

ミナの姉に言われて、私たちは、部屋の中に入っていった

「うわっ！な、なんじゃこりゃ・・・」

部屋に入ってみれば、部屋には、変な機械みたいな物があって、部屋が一番奥には、クリーム色の体を持つてるポケモンがいた

「親方様へ来ましたよ」

「あいよ」

「よつと・・・」

親方様と呼ばれてるポケモンはゆっくりと立ち上がって、そのままこっちを向いた

クリーム色の体に、黒の足や、水色の腰や尻尾、細い腕やスラツとした体格、それに、犬のように出っ張った鼻、尖った耳、胸や手の甲にある出っ張り・・・

・・・分らない・・・こんなポケモン・・・居るの？

「こんにちわ・・・私がこの親方・・・いわば、リーダーよ」

「そんで、ミュ、この二人が志願者って訳ね？」

「はい、そんで、こっちの方がうちの妹です！」

ミルの頭を撫でながら言う

なんでだろう・・・寂しい・・・

「へえ・・・」

そう言つと、親方様と呼ばれているポケモンは目を閉じた

・・・？何やつてるの・・・？

「やっぱり、姉妹だと波動の色は同じね・・・コバルトブルーの波動・・・」

「え？」

は、波動？どういう事？

それに、波動の形って・・・

まるで見えてるみたいじゃない・・・！

「どういう事？お姉ちゃん」

「うちの親方様ね、ルカリオって言う別の大陸から来たポケモンでね・・・」

ルカリオ・・・それが、あのポケモンの種族名・・・

「それで、ルカリオって言うポケモンには、全ての物の波動を読みとる力があるんだって・・・」

全ての物の・・・波動を？

「凄いね・・・」

「まあ、この力を使う機会は、そんなにないんだけどね・・・」

「それじゃあそっちの子の波動は・・・」

「マカライトグリーンの波動ね・・・」

「うん、二人共、いい波動を持つてるね・・・」

「搜索隊の素質は十分にありって感じかな？」

「じゃあ、最後に聞くけど・・・本気で搜索隊になる？」

「はい！なります！」

「私も！」

「よし、その意気込み・・・忘れちゃだめだよ？」

「さてと、じゃあ搜索隊になった訳だし・・・」

「搜索隊の証をあげないとね！」

「あ、ミュは、外で待っててくれる？」

「わかりました」

そう言うとミルの姉のミュは、外に出ていった

「それじゃあ、搜索隊の証をと・・・」

座っていた場所のすぐそばにおいてあったダンスを開けて、そこから箱みtainな物を取り出した

そして、私達の前に戻り、その箱を置いた

「さ、開けてみて？」

私は、言われるがままに開けてみた

パカッ

中に入っていたのは・・・

「地図にバッチ・・・？」

「うん、志願者にあげる物は三つ！」

「一つは、この大陸が載っている地図」

「二つ目は、そのバッチ、必ず持っていなきゃいけない、捜索隊の証よ。」

「そのバッチには、二つの機能があつて、一つはポケモンをダンジョンから救助するための転送機能、二つ目は依頼をクリアした時にもらえる救助ポイントを加算する計算機能よ」

凄いハイテクなバッチね・・・これ

「それで、三つ目なんだけど・・・」

「二人は、肩に掛けるバックか、腰に掛けるバッグ・・・どっちがいい？」

「肩に掛けるの……腰に掛けるの？」

「リンは、どっちがいい？」

「私は、腰に掛ける方がいいわ」

「私も！」

「それじゃあ、決まりね！」

そう言うと親方様は、箱を取り出した時と同じタンスを開けて、中から、腰に掛けるバッグを二つ取り出して、私達に渡した

「3つ目は、ダンジョンを探索してる時に手に入る道具を入れるバッグ！」

「これがダンジョン探索では必要不可欠の道具！」

「これで、搜索隊に必要な道具、渡したわね」

「さあ、明日から本格的に活動してもらおうよ！」

「頑張つてね！」

『はい。』

こうして、始まった……

私とミルの……

世界を・・・
この星を救う為の
冒険が・・・

第3話 ギルドに入門！（後書き）

はい、第3話 完 です

次回はいつ頃かな？

ゆっくりして行ってね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7159x/>

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

2011年12月18日00時45分発行